食肉公社の人達は、すごい技術でした。わたしが痛くないように、苦しまなくてもいいように、そして、おいしい肉となり、子ども達に使ってもらうグローブやランドセルの皮となるように、細心の注意をはらってくれました。

もうわたしは、牛ではなく肉になりました。

ふと頭上のガラス越しを見ると、そこには大勢の子ども達が真剣な顔で、肉となったわたしを見てくれていました。天白小学校の子ども達です。深野のお父さんが二頭の子牛を連れて行った学校の子ども達です。ああこんなところまでわたしたちのことを勉強に来てくれていたのか、そう思うと嬉しかったです。

（太田一輝・牛田匡哉・山本晋輔）